’24

後期日程

小論文

（情報学部）

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開いてはいけません。
2. 小論文の問題は「文系型」と「理系型」の２種類です。どちらかの型を選択して解答してください。組み合わせて選択することはできません。
3. 問題冊子は１冊（10 頁），解答用紙は文系型２枚，理系型７枚，下書用紙は文系型２枚，理系型１枚です。落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
4. 解答用紙の選択欄は該当する型のみにもれなく「○」を記入してください。
5. 氏名と受験番号はすべての解答用紙の所定の欄に記入してください。
6. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
7. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
8. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

文 次の文章を読んで，後の問いに答えなさい。

日本には，家族のあり方に関する強力な社会規範と，男性と女性に――とりわけ男性に――期待される社会的役割に関する硬直的な固定観念が存在する。そのため，家族を築く際に個人が選べる選択肢がアメリカより少ない。いささか強い言葉で表現すれば，社会的制約のせいで人々の個人的選択が縛られている結果，二一世紀の日本で家族をめぐり息苦しい状況が生まれているのだ。日本の婚姻率と出生率の低さは，そのあらわれのように思える。

私たちのインタビュー調査で見えてきたのは，日本とアメリカで家族の定義が大きく異なるということだ。私たちは回答者に，家族とはどのようなものか，そして子どもが幸せに育つために母親と父親が必要だと思うかと尋ねた。すると，日本の人たちはほぼ例外なく，家族とは，男女のカップルと少なくとも一人の子どもで構成されるものと考えていた。

それに対し，アメリカの若い世代が考える家族の定義はもっと広い。その点は，アメリカの回答者が語った内容の多様性からも明らかだ。たとえば，幼い子どもが一人いるワーキングマザーのカレンはこう述べている。「家族とは，一緒に暮らすことを選んだ人すべてのこと。私にとって核を成す家族は，夫と息子と犬です。でも，それだけではない。友人たちの存在もとても大きい。昔ながらの意味では，友人は家族とは言えないでしょう。それでも，ここニューヨークで子どもを育て，生活していくなかでは，友人たちと一緒に祝日を祝い，困ったときにも友人たちを頼ります。その意味で，友人たちのことも家族の一部と考えています」。

犬や友人まで含めるカレンの定義はかなり広いものだが，アメリカの回答者でこの種のことを述べる人は珍しくなかった。サマンサはこう語っている。「家族の定義は人それぞれだと思います。私が思うに，家族とは最も親しい中核的な人間関係のこと。生物学的なつながりはかならずしも必要なくて，友人関係など，ほかの人間関係も含めていいと思います」。オリビアも，家族とは「深い関わりと互いへの敬意で結びついた人たちの集まり」だと述べている。

もうひとつ注目すべきなのは，アメリカの回答者の多くが日本ではほぼ誰も述べなかった選択肢に言及していることだ。それは，養子を採るという考え方である。この

点も，アメリカ人が家族の定義を広くとらえていることを反映していると言えそうだ。

アメリカ人の家族観に共通する要素はなんなのか。アメリカの回答者の話でたびたび話題に上ったのは，精神面で互いに支え合うことの重要性だった。この点は，ジャスミンという女性の言葉にもよくあらわれている。「家族とは，一緒にいてくつろげて，100％自分らしくいられる人たちのことだと思います。血縁関係がある場合が多いですが，つねにそうとは限りません。思ったことをなんでも言えて，難しい局面を一緒に乗り越えられる人たち，それが家族です」。

家族の定義を広くとらえているアメリカ人は，自分と考え方の似ている人たちと巡り合い，親近感をいだき，親密な結びつきをはぐくむことが多い。私たちが話を聞いた既婚のアメリカ人たちは，そうした存在として，しばしば友人について語った。そのような友人たちは，「夫の友人」や「妻の友人」ではなく，「夫婦の友人」と位置づけられる。ひとことで言うと，アメリカの回答者たちが思い描いていた夫婦像は，二人か三人の子どもが欲しいと考えていて，人間関係のネットワークの一員として生きているカップルの姿だった。その人的ネットワークのなかには，友人夫婦や親戚，自分たちの親などが含まれる。それらの人たちの力を借りて，育児や介護をおこなうのである。

それに対し，日本の回答者は「家族」をもっと狭い定義で考えている。私たちが話を聞いた日本の若い世代は例外なく，家族とは，男女のカップルと子どもで構成されるものとみなしていた。アメリカの政治学者レオナード・ショッパは，このように家族について単一の基礎的もしくは本質的な定義が存在するという考え方を「家族本質主義」と呼んでいる。

私たちのインタビュー調査に回答した日本の若い世代はたいてい，家族とは，友人や親戚や近所の人たちから比較的独立していて，ある程度経済的に自立した存在だと考えていた。ヒトシという男性も，ほかの夫婦と親しくなることを躊躇（ちゅうちょ）していたと語る。けれども，それではもったいないと思うようになったという。

2012年に話を聞いたとき，ヒトシの妻は妊娠中だった。「両親学級に行ったとき，もったいないと感じたのは，せっかくほかの夫婦と話す機会があるのに，みんなばらばらに帰っていくことでした。どうして同じ状況の人同士で話してごはんに行ったり

しないのかな，と。ぼくたちが話しかけて仲良くなった夫婦もいます。ある夫婦は，最近子どもが生まれました。こうした機会があるのに，アナウンスが足りません。隣人でなくても，身近な場所で知り合いが増えますよね。お金も別にかからない。同じ境遇の人と接点をもてる場をもっと設ければいいと思います。少し気後れしたり，面倒くさいからいいやと思ったりする人も多いので，それをもう少し魅力的な場にしていく。そうやって人を集める努力をする。それで安心感が生まれれば，二人目につながる可能性もあると思います」。

「家族志向」の強さに関連してもうひとつ検討すべき要素は，核家族のメンバー(つまり両親と子ども)がそれ以外の家族や親戚(祖父母，おじやおば，いとこなど)とどの程度時間を過ごしているかという点だ。私たちのインタビュー調査で，家族や親戚と過ごすことの楽しさに言及した人は，日本よりもアメリカのほうが多かった。

よく言われるように，アメリカ人，とりわけ私たちの回答者のように教育レベルの高い層は，概して日本人よりも活発に遠距離移住をおこなう。アメリカでは30代と40代で自発的に転職する人が多いことがその一因だ。高く評価されるスキルや職務経験をもっている人は，その傾向がひときわ強い。

私にとって驚きだったのは，私たちが話を聞いたアメリカ人のなかに，とくに子どもができたあとで両親の近くに移住したり，(両親がすでに仕事の一線を退いている場合は)両親を近くに呼び寄せたりしたいと考える人が多かったことだ。ほとんどの人はいい仕事に就きたいと思っているが，親のそばで暮らしたいという願望を強くいだく人も少なくないのだ。前出のコナー※の言葉を再び紹介しよう。

コナーの説明によれば，彼自身も妻も家族志向が強いタイプだという。息子が生まれる前に，少なくとも月に一回は両方の祖父母に息子を会わせるようにしようと，妻に言われたとのことだ。「家族と近くにいて，家族との絆(きずな)をはぐくむことの大切さをよく理解していたのです。週末には，メイン州とニューハンプシャー州に暮らす祖父母を訪ねて，長い時間を過ごしています」(この二つの州は，夫婦が暮らすボストンから自動車で三時間程度の場所にある)。どこに住むかを決める際も，家族が大きな意味をもった。コナーはカリフォルニア大学バークレー校の大学院で学んだが，夫婦はともに東海岸出身で，結婚したあとは地元に戻ることにした。その決断の一因になったのは，家族の近くで暮らしたいという思いだった。

コナーのようなアメリカの回答者たちが語った「家族志向」は，私たちが思い浮かべ

る伝統的な家族志向――夫が稼ぎ手の役割を担い，妻が家で子どもの世話をする――とは異なる。私たちが話を聞いたアメリカの若い世代は，一緒に時間を過ごし，精神面で支え合う集団として家族を大切にしたいと思っていた。私たちのインタビュー調査では，親のそばに住んでいる夫婦が子育てで親を頼りにする(保育園や学校への送迎，子守りなど)傾向は，アメリカだけでなく日本でも見られた。しかし，三世代で一緒に時間を過ごしたいと語る人は，アメリカのほうがはるかに多かった。

私たちのインタビュー調査で家族のあり方に関して日本とアメリカで最も際立った違いが見られたのは，「子どもが幸せに成長するには，父親と母親の両方のいる家庭が必要である」という考え方に対する反応だった。日本では，約7割の人がこの考え方に賛成した。しかも，25％は「強く賛成」だと答えた。アメリカ人の反応はかなり異なるものだった。この考え方に賛成した人は2割程度。「強く賛成」と答えた人は，全体の5％に満たなかった。むしろ，「強く反対」と答えた人が30％に上った。日本で「強く反対」と答えた人は8％だった。いずれの国でも，男性と女性，独身者と既婚者の回答に大きな違いはなかったが，日本とアメリカでは明らかな違いがあったのだ。

日米の回答者たちは，以上のような考え方をする理由としてどのようなことを述べているのか。特筆すべきなのは，「父親と母親の両方のいる家庭」以外の家族形態に関して，両国の人々がいだいているイメージに大きな違いがあったことだ。日本の回答者が思い浮かべるのは，ことごとくシングルマザー世帯だった(夫と離婚したケースや，結婚せずに出産したケース)。それに対し，アメリカでは，シングルマザーやシングルファザーの家庭を思い浮かべる人もいたが，同性カップルの家庭を思い浮かべる人もいた。アメリカ人は「男女のカップルと子ども」以外の家族形態としてさまざまな可能性を想定していたが，日本人はほぼシングルマザー世帯しか想定していなかったのだ。

日本人の回答者たちは，いくつかの理由で「父親と母親の両方のいる家庭」に比べてシングルマザー世帯が好ましくないと考えていた。最も多くの人が指摘したのは，家庭で父親と母親が果たす役割が異なるという点だった。このほかには，親が一人だとさまざまなものごとへの対処に苦労する，十分な収入を得るのが難しい，子どもが寂しい思いをする，社会の偏見にさらされかねない，といったことを挙げた人たちがいた。

「子どもが幸せに成長するには，父親と母親の両方のいる家庭が必要である」という考え方について，ルミはこう述べている。「いまの日本ではそうだと思うんですよね。シングルマザーで産むと，『なんで？』という目で見られてしまう。それだから子どもが幸せでないというわけではないけれど，父親がいなければ，母親は並々ならぬ努力をしなくてはならないと思います」。

家庭では父親には父親の役割があり，母親には母親の役割があるという考え方を述べた人も多かった。「一人が母性と父性を両方担うのは，けっこう難しい。無理があります」と，コージは言う。ケンジは共働きだが，自分と妻の関係について明確にこう述べている。「妻が子どもの面倒を見るので，ぼくはちゃんと働いて給料を稼いでこいという，そんな感じの分担でした。それは妻の思いでもありました」。一方，リョウヘイは，子どもに父親と母親の両方が必要だと考える理由について，一人で子どもを育てることの難しさを挙げた。「片親は大変だと思います。二人いるほうが役割もちゃんとわけられるし。そのほうが理想的かなと感じます」。

日本の回答者には，同性カップルが子どもを育てる可能性を想定した人が一人もいなかったように，母親にしかできないこと，父親にしかできないことがあると考える傾向が見られた。たとえば，オサムはこう述べている。「悪いお父さんや悪いお母さんでない限り，二人いたほうがいいでしょう。一人で両方の役割をこなすのは大変なので，それよりは二人のほうが楽とは言わないまでも，ベターだと思います」。

対照的に，アメリカでは，父親と母親にそれぞれ異なる役割があるという考え方をする人はほとんどいなかった。また，前述したように，「父親と母親の両方のいる家庭」以外の形態として，シングルマザーやシングルファザーの家庭だけを思い浮かべる人ばかりではなかった。同性カップルも男女のカップルと同様に，適切な子育てができると考える人が多かったのだ。私たちがとくに同性カップルについての質問を投げかけたわけではなく，家族のあり方について話を聞くなかで自然にそのような考え方が示された。

二人の親で子育てをすることは，かならずしも母親と父親がいることを意味しないと，コートニーは考えている。「親が二人いるほうが好ましいのは確かです。でも，同性婚と同性愛カップルの子育てを支援する活動をしている立場から言うと，子どもには母親と父親が必要だという主張には同意できません」。リチャードも言う。「片親の家庭や同性カップルの家庭でも，幸せに育った子どもは大勢います。父親と母親が

いなくても問題ないケースがたくさんあります。子どもにとって大切なのは，自分が愛されていて，幸せで，安全で，しっかり見守られていると感じさせてくれる大人が一人でもいるかどうかです」。

子育てを担う人物が母親の役割を果たすか，父親の役割を果たすかは，育児の質に比べれば重要でないと，リンダは述べた。「重要なのは，育児の質であって，誰が育児をおこなうかではありません。周囲の大人がやさしく接し，その子の幸せのために尽くしていれば，その大人が母親の役割を担っているか，父親の役割を担っているかを論じるのは意味がないと思います」。

ただし，アメリカの若い世代も，子どもが男女両方の好ましいロールモデル（お手本となる人物）を見て育つことの価値を認めていないわけではない。この点を明確に語っているのがミーガンだ。「確かに，子どもには，同性の好ましいロールモデルが必要です。でも，シングルマザーでも子どものために男性のロールモデルを用意できます。育児は，母親と父親でおこなうものと決まっているわけではない。おじさんやおじいさんでも，男の子にとって好ましいロールモデルになりうるでしょう」。

私たちのインタビュー調査に対して，日本の回答者はアメリカの回答者よりも，父親が子どものそばにいることの重要性を語る人が多かった。しかし，これは皮肉な話だ。日本の男性は，ほかのポスト工業社会に比べて，子どもと一緒に過ごす時間がきわめて少ない。実際，本書で示すように，日本人は，父親が家族と一緒の時間を過ごすことをかならずしも重要視していない。多くの人は，家族のためにお金を稼ぐことを父親の最も重要な役割と位置づけているのだ。この点は，私たちのインタビュー調査からも明らかだ。

一般に，アメリカ人は個人主義的で，日本人は家族志向が強いというイメージがあるかもしれない。しかし，私たちのインタビュー調査によれば，これとは正反対の結論も導き出せそうだ。

出典：メアリー・C・ブリントン『縛られる日本人』（中央公論新社，2022 年）
（出題の都合上，原文の表記を変更した箇所がある）

※　この文章の少し前の箇所に，5 カ月の男の子の父親である 32 歳のアメリカ人，コナーへのインタビューが紹介されている。

文 問１　下線部，日本に存在するとされる「家族のあり方に関する強力な社会規範と，男性と女性に……期待される社会的役割に関する硬直的な固定観念」とはどのようなものか。本文にそくして説明しなさい。（400 字程度）

文 問２　著者はこの文章で，日本人が固定観念に縛られていることが家族をめぐる「息苦しい状況」を生み出していると主張していますが，それに対するあなた自身の考えを述べなさい。（600 字程度）

理 問１　次の文章を読んで，問 1-1，1-2，1-3，1-4 に答えよ。

半径１の円Ｃについて以下の問いに答えよ。答えには根拠を含めること。

問 1-1　円Ｃ上に互いに異なる点Ｐ，Ｑをとる。線分ＰＱの長さを x とするとき，x のとりうる範囲を答えよ。

問 1-2　円Ｃ上に互いに異なる点Ｐ，Ｑを，線分ＰＱが円の中心を通るようにとる。また，円Ｃ上で点Ｐ，Ｑと異なる位置に点Ｒをとる。三角形ＰＱＲの面積を最大にする点Ｒはどのように決めればよいかを答えよ。また，そのときの三角形ＰＱＲの面積 S を答えよ。

問 1-3　円Ｃ上に互いに異なる点Ｐ，Ｑを，線分ＰＱが円の中心を通らないようにとる。また，円Ｃ上で点Ｐ，Ｑと異なる位置に点Ｒをとる。三角形ＰＱＲの面積を最大にする点Ｒはどのように決めればよいかを答えよ。また，そのときの三角形ＰＱＲの面積 S を線分ＰＱの長さ x の関数として答えよ。

問 1-4　円Ｃ上に互いに異なる点Ｐ，Ｑ，Ｒをとる。三角形ＰＱＲの面積を最大にする点Ｐ，Ｑ，Ｒのとり方と，そのときの面積を答えよ。

理　問２　次の文章を読んで，問 2-1，2-2，2-3，2-4，2-5 に答えよ。

N 個の箱と k 個のボールがある。ただし，$2 \leqq k \leqq N$ とする。１個目から k 個目までのボールを入れる箱を N 個の箱から１つずつ選び，すべてのボールを箱に入れる。どのボールを入れるときでも，各箱は等しい確率 $\frac{1}{N}$ で選ばれるとする。各箱はすべてのボールが入るほど十分に大きいとする。

問 2-1　２個目から k 個目までのボールを入れるすべての箱が１個目のボールを入れる箱と異なる確率 $P(N,\ k)$ を考える。すなわち $P(N,\ k)$ は，$2 \leqq i \leqq k$ となるすべての i に対して以下の事象が起こる確率である。

i 個目のボールを入れる箱は，１個目のボールが入っている箱でない。

例えば４個の箱と３個のボールがあり，１個目から３個目までのボールを入れる箱を選ぶとき，$P(4,\ 3)$ は以下の２つの事象が起こる確率である。

・２個目のボールを入れる箱は，１個目のボールが入っている箱でない。 ・３個目のボールを入れる箱は，１個目のボールが入っている箱でない。

このとき，２個目と３個目のボールを入れる箱が同じになる可能性がある。$P(N,\ k)$ を N と k の式で表せ。

問 2-2　１個目から k 個目までのボールを入れるすべての箱が異なる確率 $Q(N,\ k)$ を考える。すなわち $Q(N,\ k)$ は，$2 \leqq i \leqq k$ となるすべての i に対して以下の事象が起こる確率である。

i 個目のボールを入れる箱は，１個目から $i-1$ 個目までのボールが入っているどの箱でもない。

例えば４個の箱と３個のボールがあり，１個目から３個目までのボールを入れる箱を選ぶとき，$Q(4,\ 3)$ は以下の２つの事象が起こる確率である。

・2個目のボールを入れる箱は，1個目のボールが入っている箱でない。
・3個目のボールを入れる箱は，1個目のボールが入っている箱でも2個目のボールが入っている箱でもない。

このとき，問 2-1 の状況と異なり，2個目と3個目のボールを入れる箱は異なる。$Q(N,\ k)$ を N と k の式で表せ。

問 2-3　任意の自然数 $n \geqq 1$ に対して，不等式

$$\left(1-\frac{1}{N}\right)^n \geqq 1-\frac{n}{N}$$

が成り立つことを n についての数学的帰納法で証明せよ。また，次の不等式を証明せよ。

$$P(10,\ 5) \geqq \frac{3}{5}$$

問 2-4　次の不等式を証明せよ。

$$Q(N,\ k) \leqq \left(1-\frac{1}{N}\right)^{\frac{k(k-1)}{2}}$$

問 2-5　任意の自然数 $n \geqq 1$ に対して，不等式

$$\left(1-\frac{1}{N}\right)^n \leqq 1-\frac{n}{N}+\frac{n(n-1)}{2N^2}$$

が成り立つことを n についての数学的帰納法で証明せよ。また，次の不等式を証明せよ。

$$Q(10,\ 5) \leqq \frac{9}{20}$$